



蘿月庵国書漫抄 尾崎雅嘉

画譚雞肋 中山高陽

煙霞綺談 西村白鳥

柳亭筆記 柳亭種彦

磯山千鳥 堀秀成

橘窓自語 橋本経亮

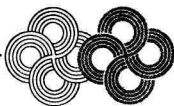
4

# 日本隨筆大成

第一期

吉川弘文館

日本隨筆大成 第一期 第二卷  
昭和二年五月廿八日發行  
編纂者 日本隨筆大成編輯部  
代表 早川純三郎  
發行者 吉川半七  
發行所 日本隨筆大成刊行會



## 日本隨筆大成

〈第一期〉 4

昭和五十年五月一日 印刷  
昭和五十年五月二十日 發行

編者 日本隨筆大成編輯部

發行者 吉川圭三

發行所 株式會社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目一番八号  
電話東京八一三一九一五二〈代表〉  
振替口座東京二四四番

製作 株式會社 たんちよう社

## 解題

本集には、蘿月庵国書漫抄、画譚雞肋、煙霞綺談、柳亭筆記、磯山千鳥、橘窓自語の六種を収める。

### 蘿月庵国書漫抄 七卷

尾崎雅嘉 著

本書は二期十卷に収められた『尾崎雅嘉隨筆』と同様な漫抄で、博覧の著者が書籍、史料等一覽の際、これを抄記して後日の用に備えたものである。勿論出版等は予期してはいなかったかと思われる。内容は有職故実、文芸風俗等にわたり、古来写本のみで伝えられた諸資料をも含んでいる。「小野道風像冠服考」より初めて「物ノ名ノウタ」に至る百余項に及んでいる。蘿月庵は著者の号であり、『尾崎雅嘉隨筆』と云うも書名其のものには、何れに従うもさしたる異いはないものと思われる。本書は七卷本が流布しており、本大成本も旧版本は無窮会本を底本として百家隨筆本、凶書寮本等を参照したが、流布の本は転写の際魯魚の誤を生じたと云う評もある。流布本は七卷本であるのは大成本の初版の抛った無窮会本が七卷本であったのが、原因であろうか。再刊に当って一応仕事を進めてしまつてから、静嘉堂本に十卷本があり、更に竜門文庫には自筆本の十卷九冊本の在る事も『国書総目録』によつて知つたが、今は発刊の運行其の他の事情もあつて、この十卷本によつて増補する事も他日に待つゝの止むない事となつてしまつた。御了恕を願いたい。

尾崎雅嘉については、再刊大成本二期第十卷の解題に略伝を附したから、それを見られたい。著書に就いても、著書名などは『国学者伝記集成』に挙げられているからそれを見られたい。ただ其の著

『事物博採』八四卷については、平凡社発行の『百科事典の歴史』に、弥吉光長氏が江戸末期の類書として注意して居られる一事を記して、今なお雅嘉の書誌関係の著書として顧られていることを記しておく。

一画 譚 雞 肋 三卷

中山高陽 著

本書は画人で、また詩書にも精しかった高陽山人の随筆である。平常画記を好んで抄訳したものが積んで巨冊を成した。その意は画の俗気を除かんと欲すれば、多く書を読んで胸襟を宏達にせんとするにあった。門人の岩処和は其の稿本より、主として画学に関係あるものを抄記して、上本を謀ったものが本書である。故に画事に関する記事が勿論多く、書画の初め、人物道釈画、山水画、花鳥画等に初まり、画学のこと、に終っている。一応画人として心得べき条々を略記しているが、一般文化に関心を持つものにも勿論興味ある随筆である。本書には自序の外に、安永四年に草された友人井上金峨の序文も添えてある。当時高陽の画に、井上金峨が讃をし、沢田東江が之を書したのを、三絶と称して愛重したと云う。この三人は遊交殊に厚かった。

本書は早く『百家説林』巻七、旧刊の本大成、『日本画論大観』『日本画談大観』にも収められて流布しているが、安永四年の三巻の刊本も亦存している。写本としては、『土佐国羣書類従雑部』に収められている。本書再刊に当っては、国会図書館及び内閣文庫の写本をも参照した。本書の巻末には「高陽先生著 門人岩処和抄録」の識語もある。

中山高陽は土佐の画人として先ず第一に指を折る高名の人である。通称を阿波屋清右衛門といい、父利右衛門勝久の代に武士を捨てて町人となり、城下堺町で骨董商として、豪商であった。その祖は

甲斐源氏香宗我部出羽守親香から出たという。子孫代々土佐に住した。姓は中山であったのを後に修して仲山とした。名は清、字は汝玄といったが、後に改めて名は象先、字は廷沖、子和等と種々改めている。号も高陽の外に、醉墨山人、玩世道人、松石齋等と称した。高陽は次男であり、性も敏捷で、藩儒富永惟安に教を受け、書は関鳳岡に、画は彭百川に学んだ。殊に人物山水に長じたと言う。宝曆八年十二月には允許を得て江戸に出で大いに書画の研究に努め、書は東坡に倣い、画は遠く宋元に廻り、気品の高い俗離れのした南画を描いた。彼は単なる技巧上の画家ではなく、人格素養の深い事、海南画壇の第一人者であったとの評がある。安永九年庚子二月病を得て、姪秀種に迎えられ、土佐に帰り、三月十三日歿した。年六十四、土佐郡薊野山に葬る。著す所本書の外、『観鷺百譚批考』(一卷)『高陽山人詩稿』(三卷)等がある。なお其の伝記としては、寺石正路著『高陽山人』の好著がある。

### 煙霞綺談 四卷

西村白鳥 輯  
林 自見 校

本書は、其の師林自見の索めに応じて、遠江の国の「無間の鐘付夜啼石」についての実説を初めとして、多く三河遠江辺の巷談を録して、自見著の『市井雜談』の続篇として編せられたものである。随筆と云うよりも、真俗混淆の俗話集と云うべきものであろうか。時々自見は附記を加えている。安永二年の刊本で、其の師新井白蛾及林自見の序及び明和七年の自序がある。『煙霞綺談』の再版本を『筆の儘』と云う。

西村白鳥 遠州金谷宿の人で、京都の儒者新井白蛾に易を学び、中川乙由門の佐久間柳居に就いて俳諧を学んだ。林自見とは同郷でもある。中年頃まで家を成さず、晩年に至って遠州川崎町の柏原柯

堂の許に落ちついた。天明三年正月十五日歿した。年七十有余。西村白鳥に就いては、畏友御油の熊谷武至氏の示教による所である。

柳亭筆記 六卷

柳亭種彦著

本書は種彦生前には刊行されなかったが、『百家説林統編』下の六に、『足薪翁記』『柳亭記』と共に収められて初めて世の知る所となり、本大成にも登載せられて一般に流布するに至った。内容は上記三著共同調のものであるが、本書第一巻には「女の髪の名くさく」以下十九条、第二巻には「馬下駄并下駄の名稱々」等すべて日常生活に深い関係のあるもの、江戸市井の風俗、流行物、俗諺等を古俳諧や当時の文献によって考証を進めている。他の追隨を許さぬものがあり、後世同好の士を益する事が多く、叙述も淡々として心地よい考証隨筆である。本書再刊に当って、国会図書館写本をも参照したが、これには「柳亭筆記脱漏」と云う二十五葉ほどの草稿の未整理のものが附してある。巻末に「辰六柳亭筆記中下合本の末に合綴されていたもの 昭和三十九年六月分冊す」と云う識語がある。内容は「上村吉弥」以下十数項、「抄々録くさく」に至っているが、いかにも未整理の草稿本である。やや整理のついている初めの方には、「上村吉弥」「女の帯種々」などを見て行くと、如何にも本隨筆に収まるべきものである。只種彦には「柳亭遺稿」とも云うものが、『続燕石十種』第二巻に収められて流布している。此れとこの脱漏との関係はと、両書を比較して見ると、全く同一書であった。名前は遺稿とあるも脱漏とあっても、種彦の稿本よりの写本である。此れを本大成に収める事は世に知られている種彦の此の種の業績を一応合せ収める事になる。此れはこの大成再刊に携さわる喜びの一つでもあり、此れを手にする読者も便利かと考えるのは、一寸手前味噌であろうか。

## 磯山千鳥 一卷 写本

堀秀成 著

本書は国学者たる著者が、伊豆の湯に病を養うかたわら、徒然なるままに、度々往復した東海道折折の見聞の事などを、雅俗を交えて、気楽に書いたのが本書となったのである。草したのは後にも記するように、慶応三年であったが、序文にある明治十四年には刊行されなかつたようである。内容は、問屋、旅宿、雲助、飯盛、宿引、茶屋、旅人の項に分れている。本書の書名は、

あとをしもとゞむべきにはあらねどもこゝろなくさのいそ千鳥かな

と云うによつたものである。本書は第二期二十二巻所収の同じ著者の『下馬のおとなひ』と好一對をなす随筆である。自序や附言などがあり、巻末に、上野館林の人日下田足穂の跋文がある。足穂は、橋守部の門人小佐野豊に養育され、其の門人であつたので、江戸に出て来れば守部にも教えを乞うて歌人となつた。『続日本歌学全書』九巻には「稻舎長歌集一卷」が収められている。明治二十三年十二月六日歿す。年七十七。本書は『百家説林続編』中巻に収められただけで、他は東京博物館に一写本が存するばかりである。依つてその簡単な書誌を書いて見ると、表紙に「堀秀成先生戯著」とあるばかりで、本文の末、日下田足穂の跋文の前に「慶応二年三月草稿 同十二月中青書 同晦日成業 年四十八」とある。而して本書筆写の用紙は「皇典講究所」所用のものである。『堀秀成翁略譜』を見ると、『磯山千鳥』の著わされたのは正に此の年で「四月、甲府を立つて、伊豆国熱海に湯治す」とある。然し明治十四年には『下馬のおとなひ』の自序を草しているから、此の時に出版の意もあつて、秀成と云う条に「明治十四年の夏」の識があるのであろうか。又本書が『百家説林続編』中巻に収められているのを見ると、或はこの皇典講究所の用紙を用いた草稿が、その底本となつたのではあ



るまいか。今泉定助翁は堀秀成の門人であり、皇典講究所とも深い関係もあり、又『百家説林』の編者でもあったからである。なおこの写本には『徳川家敬氏寄贈』とも識してある。他に類本のない事であり尊重すべきものと思う。本書再刊に当っては此の本を参照した。

橘 窓 自 語 九卷

橘 本 経 亮 著

本書は、京都に於ける故実家として、又歌人としても高名であった著者の見聞隨筆であるから、自から禁中諸事の事、有職故実のこと、京都及畿内の諸社、又は近代公卿諸家の逸事など、内容は豊富で、興味ある記事が多い。第三巻の末に「享和元年辛酉冬 春のうめ津人 経亮、

みきくことよしあしわかず書つけてわがひとりねの友とこそあれ

と隨筆執筆のよる所を示しているから、必ずしも他に示すために草したものではないのであろう。然し経亮は藤貞幹と共に当時斯界の第一人者と云うべきであらうか、京都に遊ぶ学者など、皆一度は経亮を訪ねて、其の案内指導などを受けているようである。後人に利益を与えまた興味ある隨筆の一つと云うべきであらう。本書は大正年間、谷文晁の手写本によって『鼠璞十種』に収められて、世の知る所となったが、更に彰考館蔵本の系統の本によって旧刊大成本に収められて、更に一般に流布したかと思われる。本書再刊に当っては、内閣文庫蔵の伴蒿蹊や北川真顔の書入本、又同文庫蔵樹下茂国（明治十七年歿）の旧蔵本などを参照した。明治に至るまで諸名家の注意する所となったものと思われる。

橘本経亮の略伝を考えるには、木村捨三稿「橘本経亮の家系と日記」（『集古』二〇六・二〇九・二一〇・二一一・二一二・二一九）を先ず挙げねばならない。其の家系の所を抄記すると、

經亮 伊勢橋昆經の男、宝曆五乙亥年二月三日生、明和二年八月三日家督相続、同年九月二十六日  
 日出仕十二歳、内非藏人、賜名伊豆、同八年三月十日改肥後、安永十年三月十五日大宮御所御雇  
 出仕改土佐、寛政七年正月十三日肥前、文化元年六月二十日以養子經徳為相続、梅宮神社禰宜、  
 安永七年十二月二十二日任肥後守同日叙従五位下、于時二十五歳、天明六年三月十三日叙正五位  
 下、文化二年六月二十日死。

これが經亮の官歴である。

今「集古」の記事を引用したので、もう一つ三村清三郎編「続近世花押譜」(六十九)の記事を、前  
 の記事との重複をさけて、抄記しておこう。

号橋窓、梅窓、香果堂、豪放不羈にて、色々奇話を伝う。高橋凶南門人、有職に委しかりしか  
 ど、年寿長からざりし為め、著述も定稿少なりし。墓は京西梅津村字萩原、梅宮の西、竹林中  
 に在りと云。

經亮の国学の師は上田秋成であろうか。又和歌の師は小沢蘆庵である。この秋成と蘆庵との初顔合  
 せに、經亮が来合せて蘆庵の琴に合わせて笙を吹いた事が伝えられている。後年經亮は蘆庵に一時破  
 門された事もあり、人物としては勿論賞めてばかりいらぬ人であるが、京都に於ける故実関係では  
 当時の第一人者で、多くの学者との関係もあり、羽倉敬尚氏稿「故実家橋本經亮」には其の周囲の人  
 物として梨木祐為、小川萍流、佐々木春行、岩垣彦明、秀川景柄、西村正邦、山田以文、沢益、慈  
 延、柴野栗山、本居宣長其他が挙げられている。山田以文の蔵書は其の子孫の鉄道の時代に静嘉堂文庫  
 に一括収蔵されている。其の中には經亮の自筆の草稿も交って居り、紙数の少ないものながら「香菓  
 隨筆」と云う自筆の一本もあった。なお、羽倉敬尚氏には「故実家橋本經亮伝」油印や「有職故実学

者橋本経亮の遺書」〔典籍〕卷十）等がある。

目次

蘿月菴国書漫抄	一
画譚雞肋	一七
煙霞綺談	一七
柳亭筆記	二四
磯山千鳥	三三
橘窓自語	四三

(解題 丸山季夫)

薩月菴國書漫抄



目次

卷之一

小野道風像冠服考	二	大式三位宇治十帖を添るといふ説	六
綿帽子をよめるうた	五	日本留住唐人、隠元、即非、木菴	六
服ニ紅雪紫雪一	六	等舶来、国性爺使者来舶	六
大夫於国、かぶきそうし、古写本	一六	長崎を深江浦といひし事	三〇
膳部雜記、伊勢貞方	三	尚齒会	三

卷之二

魔仏一如之図	三〇	今井似閑松堅の弟子たる事	四
名物楽器目録	三三	深草元政貞徳の弟子たる事	四
松永貞徳を和仙と称する事	三三	高田馬場流鎗馬画図	四
狩野益信の歌	四	旧度図、三十二品	四

卷之三

小栗小次郎、遊女てる姫の事	五	近代俗書の真偽	六
東野州常縁本領にかえること	五	太平記	六

和字

小野お通の書

宮本武蔵

姓名よみこえの相違

立髪

丹前

六法、だんじり

大八車

べら坊

かうて候、参り候、といふ詞

らうさい、かたはち

舞本

絵師宗達

石うす本

曾我ものがたり

向ふより髪をすく事

上るり十二段

りんき講

佐藤五郎左衛門あやつりを見て学

六

問に志す

六

津浪

六

年号改元

六

弱冠作文始並懐紙寸法の事、位置

六

書様の事、闕字事

六

からの御ことは

六

門院の号、かどの名

六

こがねのもじの御経

六

さとだいら

六

尺八

六

月はもれの連歌

六

弓張月のいるにまかせての連歌

六

牛追もの

六

似せ画

六

南殿のさくら

六

蝦のたゝかひ

六

茶のみをうえし事

六

白紙のうたの事

六

講師の題をよみあぐる事

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六

六



神戸二茶屋木屋藤左衛門家藏信長

公の文

同人所藏源氏物語奥書

隆達、籠斎、小うた

左寺古瓦のうつし 左寺即今東寺

榊枝文台、松枝文台

今様合

放生会

星辰

卷之四

夜御殿

萩戸

藤壺

梅壺

桐壺

和歌所図

事点図

後架

国朝年号譜

天下は天下の天下一人の天下にあ

らず

散位

御幸

崩、薨、卒、逝

散状

禁博奕

建仁寺垣、梶原垣

潤筆料

つちなべ

焼き石

流星

礼紙

讃岐円座

手洗

共

共

共

共

共

共

共

共

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇